

## 喪失と脱却

### ワーズワスの『ピール城』

松島正一

一八〇五年二月五日、ウィリアム・ワーズワスの弟ジョンが船長をしていた東インド会社の帆船が、ウエイマス海岸の沖で沈没し、ジョンは三十三才で死んだ。彼は翌三月の手紙で、「私の人生から切り離されて取り戻せない何かがあると感じる」と書いている。この事件はワーズワスに大きなショックを与え、その結果彼は二か月間余り、何も書けなかったと言われている。

ジョンの死に対して、ワーズワスは三つのエレジーを残している。一八〇五年の『弟ジョン・ワーズワスを追悼するエレジー』、『雑菊に寄せて』と、一八〇六年の『サー・ジョージ・ボームントの描いた嵐の中のピール城の絵に示唆されたエレジー』(“Elegiac Stanzas Suggested by a Picture of Peele Castle”)である。

『ティンタン・アベイ』(一七九八)で、ワーズワスは「自然は自然を愛する者を決して裏切らなかつた」とことを確信している。しかし、嵐という破壊的な自然に弟の生命は奪われてしまったので、自然への彼の信頼は揺らいでしまつた。これから論じる『ピール城』は弟の死を契機として、詩人の心に起こった精神的変化を告白した

哲学的な作品である。

ハロルド・ブルームは『ピール城』を自然を絶対的真理とする「自然の崇拜者」であったワーズワスのパリーノード（取り消しの詩）であると言っている。彼の作品において、『ピール城』の占める位置は、コウルリッジの『失意のオード』、バイロンの『この日、わが三十六歳を終る』、シェリーの『生の凱旋』、キーツの『ハイペリオンの没落』と同じように、喪失とそこから脱却を歌った作品と言える。

ワーズワスは、一八〇六年五月ロンドンのサー・ジョージ・ポーモント邸を訪れ、そこで「嵐の中に立つピール城」(“Peele Castle in a Storm”)の絵を見た。その絵を見た詩人は十二年前の一七九四年の八月、ピール城の近く、ランカシャー州ランプサイドに四週間滞在し、毎日その城を見ていた体験を回想することになる。

詩はポーモントの「ピール城」の絵への呼びかけで始まる。

I was thy Neighbour once, thou rugged Pile!

Four summer weeks I dwelt in sight of thee:

I saw thee every day; and all the while

Thy Form was sleeping on a glassy sea.

汝（じ）がつ（つ）つした城よ、私（わたし）はかつて汝（じ）の隣人（りんじん）であった。

夏の四週間（よ）も、汝（じ）の見える所（ところ）に住（す）んだことがあった。

毎日汝を眺めていたが、いつも  
汝の姿は鏡のような海の上で眠っていた。

「ここ」呼びかけられている「城」は、詩人の眼前にはない。この詩を通して、光景と目撃者との間には距離がある。詩人は「かつて(once)」「城の「隣人」であったと宣言するが、「隣人」という語はワーズワスが城の近くに住んでいても、城から離れている、城と一体化していないという印象を与える。

So pure the sky, so quiet was the air!

So like, so very like, was day to day!

Whene'er I look'd, thy Image still was there;

It trembled, but it never pass'd away.

How perfect was the calm! it seem'd no sleep;

No mood, which season takes away, or brings:

I could have fancied that the mighty Deep

Was even the gentlest of all gentle Things.

大空は実に澄み、空気は静寂であった。

そのように、毎日毎日同じであった。

私が眺めるといつも、汝の姿がそこにあつた。

姿は震えることはあつても、消え去ることはなかつた。

その静けさは何と完璧！ それは眠りのようには見えなかつた。

季節が取り去り、もたらす空気はなかつた。

あの力強い海はすべての穏やかなもののおかげで

最も穏やかなものと、私は想うことができたであらう。

詩人は十二年前の若い時に見た、「震えることはあつても、消え去ることはなかつた」穏やかな海に囲まれたあの城の情景を、それがこの城の真の姿だと想っていた。しかし、ポーモントの描いたピール城は荒れ狂う暴風雨の中に独り雄々しく屹立する姿であつた。その絵は『ティンタン・アベイ』の言葉を借りれば、「内面の風景」(“the picture of mind”)であり、「生命」そのものようであつた。そして詩人は自分が若い日々を描いたかもしれないピール城の絵を考える。

And THEN, if mine had been the Painter's hand,

To express what then I saw; and add the gleam,  
The light that never was, on sea or land,  
The consecration, and the Poet's dream;

I would have planted thee, thou hoary Pilc!  
Amid a world how different from this!  
Beside a sea that could not cease to smile;  
On tranquil land, beneath sky of bliss.

Thou shouldst have seem'd a Treasure-house, a mine  
Of peaceful years; a chronicle of heaven:—  
Of all the sunbeams that did ever shine  
The very sweetest had to thee been given.

A Picture had it been of lasting ease,  
Elysian quiet, without toil or strife;  
No motion but the moving tide, a breeze,

Or merely silent Nature's breathing life.

Such, in the fond delusion of my heart,

Such Picture would I at that time have made:

And seen the soul of truth in every part;

A faith, a trust, that could not be betray'd.

ああ、あの時、もし私が画家の手を持っていて、  
そのとき自分が見たものを描くことができたら、  
海の上にも陸地にも決して存在しない、あの輝き、あの光、  
聖別と詩人の夢とを付け加えることができたら。

古色蒼然たる城よ、私は汝をば、

この絵とは全く異なつた世界に置いたことだろう。

微笑むのを止めることのない海のほとりに、

静かなる陸地の上か、至福の空の下に。

汝は宝庫、平和なる年月の宝庫、  
天国の記録のごとく見えたであつただろう。  
かつて輝やきし太陽の光の内の  
最も美しきもの汝に与えられたのだろう。

それは労苦も鬭争もない、永遠の安逸と、

極楽浄土エリユシオンのような静けさの絵、

動く潮流、微風、静寂な自然の呼吸する生命のほかには  
何の動きもない極楽世界の絵であつたろう。

私の心の愚かな幻想で、そういう絵を、

そういう絵をあの時私はいたことだろう。そして

その絵のすべての部分に、真実の魂を

裏切られることあり得ない一つの信念、一つの信頼を見たことだろう。

かつて「自然の崇拜者」であつた自分が、画家であつたら描いたであろう城の絵は、自分の見た城の表面だけであつただろう。「海の上にも陸地にも存在しないあの光」という有名な語句は一読した限りでは、ワーズワス

の追求すべき理想にみえるが、この光は現実を何も知らない人間の「心の愚かな幻想」であつた。自分が描いたであろう城は、若い自分が真実だと思つてゐた、人生についての未熟な思想だけを描いたものにすぎなかつた。自分は詩人として現実には存在しないものを詩人の特権として「聖別」し、歌つてきたのだという深い反省の心がここにはある。十二年前に見たピール城とそれを取り巻く海の景色は、今、弟ジョンが死んでみると、ホーモントの描いた陰気な城と海の絵、それこそが真実で、自分の今の気持ちにふさわしいことに気づくのである。

「ここまでは前半で、詩の後半は轉換し、一八〇六年の詩人の感情が語られる。

So once it would have been, — 'tis so no more;

I have submitted to a new control:

A power is gone, which nothing can restore;

A deep distress hath humanised my Soul.

Not for a moment could I now behold

A smiling sea, and be what I have been:

The feeling of my loss will ne'er be old;

This, which I know, I speak with mind serene.

かつてはそういうものであったろう　今はまったく違つ。

私は新しい制御に従い、

ある力は去つてしまい、何ものも回復することはできない。

深い苦悩はわが魂を人間らしくした。

今や私は微笑む海を見ても、

過ぎし日の自分であることは一瞬たりともありえないだろう。

私の喪失の悲しみはけつして古びることはないだろう。

このことを今は静かなる心で語るのである。

詩人の「今はまったく違つ」という語句は、詩人がもはや自分を過去の同じ人間とは考えられないということを示している。もはや過去の夢見る詩人ではなく、「新しい制御に従つた」人間となると詩人は述べる。

ここに「制御」なる語が登場するが、「制御」は「義務」と言い換えられるのか。ワーズワスはこの事件の一年前の一八〇四年二月、『義務へのオード』(“Ode to Duty”)で「私は汝の制御を懇願する」(“I supplicate for thy control”)と「義務」の女神に向かって祈っている。自然には、破壊的な力と保存的な力という二つの相反する力があるが、「義務」とは抑制する力、それも何か道徳的でストイックな「制御」であろう。

詩人は「ある力は去つてしまい、何ものも回復することできない」と述べるが、これは『不滅のオード』

（“Ode—Intimation of Immortality from Recollections of Early Childhood”）のなかの「幻の輝き、あの栄光と夢」の喪失と同じであるのか。「深い苦悩」とは、かつては確実になつた詩を書く力の喪失、ビジョンの喪失か、それとも弟ジョンの死であるのか。それがなんであれ、詩人の魂は喪失によつてかえつて、人間らしくなつた、『不滅のオード』の言葉でいえば、「われらが生きるよすがなる人情」（“the human heart by which we live” St. XII）を獲得するのである。詩人は「過ぎし日の自分であることはない」と言い、自分が過去から切り離されてしまつていなければならないことを認識している。

詩人はポーモントに、弟が生きていたら良き友となつただらうと呼びかけ、彼の絵を称えるのである。

Then, Beaumont, Friend! who would have been the Friend,

If he had lived, of Him whom I deplore,

This work of thine I blame not, but commend:

This sea in anger, and that dismal shore.

O `tis a passionate Work!—yet wise and well,

Well chosen is the spirit that is here;

That Hulk which labours in the deadly swell,

This rueful sky, this pageantry of fear!

And this huge Castle, standing here sublime,

I love to see the look with which it braves,

Cased in the unfeeling armour of old time,

The lightning, the fierce wind, and trampling waves.

さらば、わが友ポーモントよ、きつと君は彼の友となりしならん、  
私が嘆き悲しむ弟がまだ生きていたならば。

君のこの絵を私は非難するのではなく、称えるのです。

怒れるこの海と、暗澹たるあの岸边とを。

おおこれは熱情溢れ、だがここに現わされた精神は  
賢く優れた、よく選ばれた作品、

荒れ狂う大波のなかでもまれる破船、

この悲しげなる空、この恐ろしき光景。

崇高な姿で立っているこの宏壮な城、

私はそれが昔の時代の冷酷な鎧と、

稲妻と、激風と、怒濤に包まれて立ち向かう

雄々しい姿を見るのを愛する。

「恐れるこの海、暗澹たるあの岸边」「荒れ狂う大波のなかでもまれる破船」「この悲しげなる空、この恐ろしき光景」を描いたポーモントの絵は称えるべきものである。とりわけ詩人は「崇高な姿で立っているこの宏壮な城」に倫理的な強さを見いだす。

城は死すべき人間が作りあげたもの、人間の夢がこの地上に具現されたものである。城は耐えるが永遠ではない。城は廃墟として今ここに在るが、廃墟とはそれを建設した今は消えてしまった人間の夢の遺跡である。「昔の時代の冷酷な鎧に包まれて」「自然の怒りに雄々しく立ち向かう城の姿を愛するワースワスは、ピール城にピクチャレスクな美ではなく、廃墟と結びついた崇高な美を見ている。「崇高」とは、快い感情を呼び起こす古典的な「美」に対して、時として恐怖や苦痛を生じさせつつも、我々の感情の高揚感をもたらすものをさすときに使われた美学用語である。

城の廃墟は詩人を開放し、「同類」との一体化への道を開いてくれることを認識した詩人は、わが心に別れを告げる。

Farewell, farewell the Heart that lives alone,

Hous'd in a dream, at distance from the Kind!  
Such happiness, wherever it be known,  
Is to be pitied; for 'tis surely blind.

But welcome fortitude, and patient cheer,  
And frequent sights of what is to be born!

Such sights, or worse, as are before me here.—  
Not without hope we suffer and we mourn.

わなば わなばー 回類から遠く離れし  
夢を樓家として、独り生きぬ心よー

それが何処で知られよう、そのような幸福は  
憐れむべきものだ。なぜならそれは盲目なものだから。

心から迎えよう！ 不屈の精神よ、忍耐強い元気よ、  
いま目にしているこの絵の光景、またはより悪しきもの、  
耐えなければならぬ度重なる光景よ。

私たちは希望無しに苦しみ悲しんでいるのではないのだ。

このエレジーでは二人のワーズワスが哀悼されているが、「同類から遠く離れて、夢を棲家とし、独り生きる心」に向けられる別れの言葉は、詩人の弟ジョンに対してではなく、詩人ウィリアム自身に向けられている。ここでは、今まで孤独を愛し「夢を棲家」として生きてきた詩人である自分と別れ、同類とともに生きていくこととする決意が表明されている。人間と人間を結びつけ、個人を同類の一人とするのは、「苦悩」(suffer)と「哀悼」(mourn)であって、喜びではない。詩人が「耐えなければならぬ」光景とは、現実の城であるとともに絵画に描かれた城でもある。詩人ワーズワスが希求しているのは、記憶と現実の経験が相互に浸透したイメージを作る力、芸術行為への信仰である。詩人は絶望のなかでも希望を持ち続けて生きていくことというオプティミズムで詩は終わる。

弟ジョンと若きウィリアムも死んで、ルーシーのように他の球体(sphere)に移し替えられることはない。従って『ピール城』には回復の可能性はなく、嵐の未来に向き合うことのなかにのみ慰めがある。このエレジーには、シエリーがキーツを悼んだ『アドネイアス』で用いられているような伝統的な装飾はなく、「もはや嘆くな」というのはリシダスは死んでいないのだから(“Weep no more … for Lycids is not dead.”)というような伝統的なエレジーとは逆になっているのが特徴的である。

『ピール城』は古典的な道徳倫理である「不屈の精神、忍耐強い元氣」を祝福するという点で、十八世紀的な

詩作品といえよう。例えば、『抒情小曲集』の「序文」では「詩語」が批判されているが、第一行の「汝（*thou*) った城」(“*thou rugged Pile*”)などはその典型で、「人間の言葉」(“*the language of men*”)ではない。『ピール城』で称賛される古典的なストイシズムは、『ティンタン・アベイ』で祝福された自然との一体感という「喜び」とは矛盾するわけではない。保守的なワーズワスへの道という点では、『ピール城』は『義務へのオード』につながる作品であると言える。

あるもの、あるいは場所、と詩人との出会いと別れといった同じようなテーマを扱ったという点で、『ピール城』は『ティンタン・アベイ』と比較されて論じられることが多い詩である。

『ピール城』は「私は汝の隣人であった」という呼びかけが始まるが、「隣人」という言葉に示されるように、そこには詩人と対象との疎外がある。これに反して『ティンタン・アベイ』では、詩人は風景の内部、風景の一部であって、「隣人」ではなかった。『ピール城』では詩人が城の隣人であったのは「かつて一度」(once)だけであったが、『ティンタン・アベイ』では「また再び私はこれらの聳え立つ険しく高い絶壁を見る」(“Once again/ Do I behold these steep and lofty cliffs, /” “再び私は見る” “これらの雄木森の僅かな列”) (“Once again I see/ These hedge-rows”)と「もう一度」(Once again)が繰り返し用いられ、ここには詩人と対象との一体感がみられる。『ティンタン・アベイ』では過去は未来へと開かれていたが、『ピール城』では未来はそれ自体が謎で、人生はいぜんとして神秘的なままである。ワーズワスは「記憶の詩人」といわれるが、『ピール城』以後のワーズワスの詩は記憶の詩ではない。

